team3. 愛色 leciel
theme. 食育とコミュニティ

D
石塚孝太郎・富田麻未・佐藤菜生・太田晶子・笠原るしえ
世良竜也・原菜月・石田詩織・林知恵実　教員：武田亘明

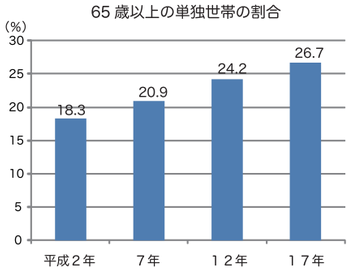
N
石川綾乃・大友咲乃・川島育美・坂爪里紗・高宮庸司郎
鉢呂真美・三上奈月・吉田育美　教員：須田恭子

研究の背景と目的

私たちは、現代社会のコミュニケーション不足や食に関わる問題、地域の活性化に注目してきました。
現在日本は、外食産業が盛んになったり、コンビニやスーパー等の惣菜・即席食品が普及し利用機会が増えています。同時に、核家族化や共働き夫婦の増加によって、子どもが食材の知識や関心を持つ機会を失っていると考えました。また、生活の中で得た実感から考えても、現代社会は人と人とのコミュニケーションが希薄になり、近隣住民や生活圏で身近な人とますます関わらなくなってきているのではないでしょうか。顔見知りでも挨拶を交わさなかったり、町内会の催しに人が集まらないこと等からも地域のコミュニケーションが減少していると感じます。

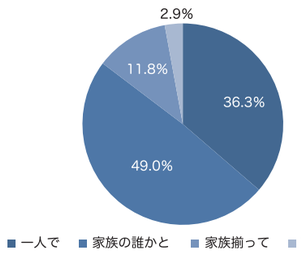
私たちの住む北海道の特性としては、一次産業が盛んで食料自給率が高い事が挙げられますが、地域では少子高齢化、若者の都市部への進出、産業全体のマイナスイメージによる後継者不足といった問題が明らかになっています。
これらの問題から、北海道の特性を活かした地域活性が求められていると考えました。
そこで、地域の人々と自然にコミュニケーションがとれ、食べる事や食べ物を大事にできる社会を目指し、人と関わるコミュニティーの中で食を通したコミュニケーションをしていくことで、食への理解を深める仕組みを考えていこうと思います。

高齢者のいる一般世帯のうちの
65 歳以上の単独世帯の割合



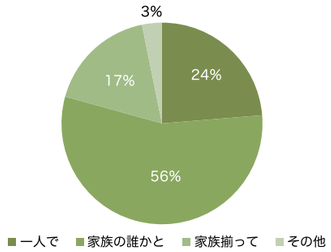
資料：総務省統計局「国勢調査」平成 17 年度

北海道の中学生の朝食摂取状況



資料：北海道 PTA 連合調べ　平成 16 年度

北海道の小学生の朝食摂取状況



資料：北海道 PTA 連合調べ　平成 16 年度

内　容

内容①: 畑コミュニティ

コミュニケーションを促し、食育に貢献するようなもののかたちとして、畑を中心としたコミュニケーションの場を生み出すことを考えています。

ー なぜ畑か

畑の良い点は、食育とコミュニケーションに関係していることです。まず、畑は農作物を育てられる場であり、その成長の過程を体感できることから、食育に大きく関わります。また、屋外の決まった場所に変わらずある、畑のような場所は、人が集まる場として適切です。

ー 畑単位のコミュニティー像

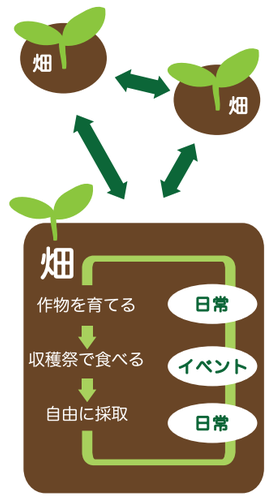
想定するのは、１つの畑に１つのコミュニティです。この”畑単位”のコミュニティの中で次に示すようなサイクルを繰り返します。

①畑をつくりコミュニティを形成
②畑単位で作物を育てる
③共同作業で、体験の共有と情報交換が行われる
④収穫祭を開き、育てた作物をたくさんの人と一緒に食べる
⑤次の栽培が始まるまでの間、作物は自由に採取できる
⑥作物を育てる・・・(繰り返し)

このサイクルは、目標を持って取り組む要素、にぎやかな要素、気軽な要素を含みます。このような変化のある流れを組むことで、コミュニティを継続させていきます。

ー 展開方法

コミュニティを畑単位で考えることで、地域ごとの特徴を活かした畑コミュニティの形成や、畑と畑の交流によるコミュニティの拡大など、さまざまな展開方法が考えられます。



内容②: 農業体験ツアー

ーなぜツアーか

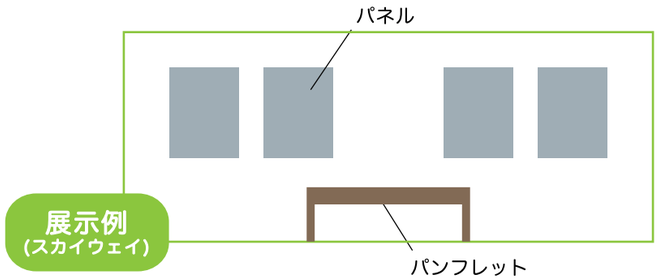
現地に赴き、直接種まきから収穫までの過程を体験し、食材を調理して食べることによって食の知識を高める。実際に農業を営んでいる人に教わることができ、自分たちで試行錯誤して農業をする基盤を作る。また、ツアーにすることによって、イベント的に楽しんで農業を体験することができる。

ー展開方法

①ツアーの計画を立案し、参加者を募集。
②参加者が農家に赴き、種まき、収穫などの農作業を体験する。
③実際に自分が収穫した食材を調理して、みんなで食べ、コミュニケーションを図る。
⇒帰ってからも農作業に興味を持つことができ、『畑コミュニティ』に繋がる。

最終アウトプットイメージ

企画内容をパネルにまとめ、展示する。その他に、企画自体のパンフレットや、この企画に含まれる農業体験ツアーのパンフレット等を制作する。



来期の活動計画概要

～３月 / コンセプト、企画概要などの基本的な事項の決定
４月 / データ収集、詳細な企画の計画
５月 / データ収集、詳細な企画の計画
６月 / 企画全体の最終確認
７月 / パネル、パンフレット等の制作
８月 / パネル、パンフレット等の制作
９月 / 完成